

社会的養護と発達困難を有する子どもの発達支援 —児童心理治療施設職員への聞き取りを通して—

○田中裕己 田部絢子 内藤千尋 高橋智
(横浜いずみ学園) (金沢大学) (山梨大学) (日本大学)
Keywords : 社会的養護、児童心理治療施設、発達困難、発達支援

1. はじめに

昨今、不適切な養育・被虐待・ネグレクト等による発達困難を抱える子どもの急激な増加を受け、そうした子どもに対して安心・安全な生活の保障、教育と発達の保障を基底とした発達支援を提供する社会的養護のシステムと実践がいっそう重要性を増している。

その一翼を担う児童心理治療施設は2016年の児童福祉法一部改正に伴い、「情緒障害児短期治療施設」から名称が変更となった。施設の支援では心理治療・生活支援・学校教育・医療等が連携し、24時間を通して子どもに対する発達支援が行われている。

児童心理治療施設において被虐待や障害を有する子どもの在籍率は他の児童福祉施設と比較して顕著に高く、厚生労働省の児童養護施設入所児童等調査結果では、全国の児童心理治療施設入所児童のうち被虐待経験のある児童は78.1%、何らかの障害の診断がある児童は84.2%であった（厚生労働省子ども家庭局：2020）。

田中ほか（2020）の調査において、児童心理治療施設に入所する子どもには「被虐待・ネグレクトやいじめを受けた経験は“衝動的”“気分の浮き沈み”“大人への甘えと反発”“他の子に対するひがみ”等の行動特徴として現れる」ことを示している。併せて入所児には睡眠や食、排泄、身体感覚運動の困難や身体症状等各種の発達困難が身体化していることを明らかにし、子どもの抱える重層的な発達困難を支援していくために「衣食住や睡眠などの成長・発達の基盤を充実させ、そうした安心・安全な生活の保障のもとに学校教育と連携・協働した発達支援を行うことが不可欠である」と指摘している。

このように児童心理治療施設入所の子どもの多様な発達困難を有していることが指摘されているものの、発達支援のあり方について実践に基づいた検討は不十分である。本報告では児童心理治療施設職員への聞き取り調査を通して、入所の子どもの発達支援のあり方を検討することを目的とする。

2. 方法

2021年4月、国内の児童心理治療施設に勤務する複数名の職員を対象にインタビュー調査を実施した。インタビューの内容は、子どもの生活上の困難に介入する中で、どのような関わりが子どもの発達に繋ることになったのかについてうかがった。分析にあたっては、エピソードをもとに職員の支援を通して変化していく子どもの内面世界の発達に着目して考察する。

なお、倫理的配慮・個人情報保護の観点から、複数名の職員の性別・年齢等や勤務する児童心理治療施設の基本情報については公表を控える。

3. 結果

※以下のエピソード記述において、子どもの語りには「」、職員の語りには<>を用いる。

【事例 苦手な食べ物を克服したAさん】

Aさんは、魚に全く手を付けられず、職員と食事を残すやり取りで毎回揉めていた。ある日、職員aより<魚食べたかい？>と聞かれると、「全然。魚が本当に食べれないんです」と返答。職員aが半量取り分け食べるよう促すが「無理です」と極端な拒絶。しばらくして、部屋から顔を覗かせているAさんを見に行くと、量としては変わらず、促しにも無反応なため、<食事は一日に必要な栄養が計算されている。しっかり食べなさい>と厳しく指導される。Aさんは「夜おかわりするからいい」「栄養バランスとして食べる必要

はない。管理される筋合いはない」と反発した様子を見せる。

別の日に、職員aと異なったアプローチを試みた職員bはAさんの側で一緒に魚を食べてみた。職員bは<魚の何が苦手なの？>とAさんに聞くと「この魚は出来立てじゃないからパサパサする」「みそ焼きは口の中にべちゃった感覚が広がるから苦手」「カマの部分は油をすごく感じる」など食べられない理由を語る。職員bは話を傾聴しながら、お魚漢字クイズを出題することや調理法を解説する等、楽しく食事の時間を過ごしていると、Aさんはほとんど魚を残さず食べることができた。食べられた流れで、これまで魚を残すやり取りでなぜ反発してしまったのかについて問うと「他の職員は話を聞いてくれなかったから。ただ、食べろ！って言われても無理でしょ」と語る。それ以降、魚をほとんど食べ残すことなく「今日も頑張ったよ」と職員に報告してくれるようになった。

4. 考察

マークスミスほか（2018）は施設養育における食事を通じたケアについて、「食事は単なる栄養摂取ではなく、それを通して関係を築き深めていく手段として、象徴的な意味を持つ」ことや「食に関連した経験を共有し、それによって形成された絆や関係を通して、自分がケアを受けていると実感できる」ことを示し、乏しい経験を補い、関係形成の方法を学び直す機会となり得る食事の重要性を指摘している。

田部・高橋（2019）は、発達障害当事者の食の困難は偏食のみならず多様であることを明らかにし、特有の感覚過敏、身体感覚運動の調整機能の困難とともに当事者が抱える各種の不安・ストレス等にも起因していることを示唆している。支援においては苦手さや不安・恐怖感・ストレス等について丁寧に聴き取りながら理解し、当事者の支援ニーズを十分に踏まえながら支援を進めていくことが不可欠であることを提言している。

本事例では、Aさんが職員と一緒に食事を摂る中で、食の困り事に関するニーズを丁寧に聞いてもらい、受け止められた体験や信頼関係の形成においてAさんの気持ちや安定し、苦手な食べ物に向き合う土台が生まれたと考えられる。

5. おわりに

本報告では児童心理治療施設職員への聞き取り調査を通して発達困難を有する子どもの発達支援のあり方について検討した。発達支援においては、職員が子どもと共同生活を送りながら、日常の中の出来事を重要な発達促進の機会として捉え、子どもの抱える発達困難についての丁寧な傾聴を通して信頼関係を築きながら、伴走的発達支援を行っていくことが不可欠である。

文献

厚生労働省子ども家庭局（2020）『児童養護施設入所児童等調査の結果（平成30年2月1日現在）』。

マークスミスほか（2018）『ソーシャルペダゴジーから考える施設養育の新たな挑戦』明石書店。

田部絢子・高橋智（2019）『発達障害等の子どもの食の困難と発達支援』風間書房。

田中裕己・田部絢子・内藤千尋・高橋智（2020）児童心理治療施設入所の子どもの有する発達困難と支援の課題—全国児童心理治療施設職員調査から—、『SNE ジャーナル』第26巻1号。

（TANAKA Yuuki, TABE Ayako, NAITOH Chihiro, TAKAHASHI Satoru）